
● 編集後記

本号より、連載「ゲノム科学と医薬品研究」が3回シリーズで始まりました。最近、「ゲノム」とか「ファーマコゲノミクス」ということばを学会誌だけでなく、一般誌、新聞紙上でも目にするようになりました。この連載で読者の方に現状を理解いただければと思います。

グローバルに活動している製薬企業では、ポストゲノム研究を自社またはベンチャー会社との共同研究等により推進していこうとしています。このゲノム創薬の目指すところは、画期的新薬創製で、このことへの期待は大きい。しかし、ポストゲノム研究の先にばら色の世界が待っているわけではなく、ポストゲノム研究により得られた創薬シーズ（情報）が、医薬品として上市されるのは、化合物スクリーニングレベルで5000から10000分の1の確率、期間として15から20年先の話です。気の遠くなる話です。一方、ファーマコゲノミクスが普及していくことにより、医薬品の安全性や有効性に関する情報において、遺伝子レベルでの情報が蓄積されていきます。きっと2020年頃の医療は、今とは大きくアプローチの仕方が異なることになるのでしょう。

さて、本誌の1巻1号がでてから1年が経ちました。この間、多くの方のボランティア的協力を得ながら発刊してきました。また、投稿も少しずつ集まっていますが、もっと多くの方からの投稿を期待しております。

(K. A.)